

第1回 個性と伝統を生かす

修景には、かつて豊かであった時代の文化景観を取り戻そうとする復元的修景と、周辺環境や風土への配慮を行いながら現代的魅力（価値）を加え、新しい文化景観を創り出し、次代へ引き継いでいこうとする創造的修景があると考えられます。

近年、町家の活用やまちなみに対する関心の高まりの中で、リフォームブームが到来した感もありますが、テレビ番組に見るまでもなく少々危なっかしいと思わざるを得ない例が多く見られます。危なっかしいと思われる例をあげますと、

- ・ 単純に構造的・機能的考察に乏しいもの
- ・ 単にファッションブルにパーツとして利用しているもの
- ・ 次代へのまなざしのないもの（歴史を見据えた新しい文化となるべき本質を捉えていない）等々

これらは言うまでもなく資産の正しい評価に基づく活用ではなく、資産の食い潰しでしかありません。修景に関わる際に大切と思われる考え方は、次のように言ってもよいと思います。

個性を生かすということ……その場を成り立たせている建物の外見をとらえ、それらを再現したりもしくは、それらとの調和をはかろうとするものではない。それらが醸し出している情感や効果の因って来るところを求め、その成り立ちの要因を新しく創り出すものの中に再構築しようとする強い意志が必要である。統一感や連帯感を保ちながら画一的、均等的ではないものの在り方を探る意志が今問われている。

伝統・風土を生かすということ……形態を受け継ぐというより、その場で長い年月人々に親しまれ受け継がれ、また淘汰されてきたものごとへの正しい理解に基づくものでなければならない。単に郷愁としての再現ではなく、古から今日まで人々に魅力を与え続けてきたものの中に、さらに継続的にこれから先も人々に魅力を与え続けてゆく可能性が含まれている。それらを正しく選択する視点と、それらに今の時代の知恵の総集を付け加える技量と強い意志が必要である。

これらをふまえた修景の具体的な実例をあげ、適切な改修方法を考えてゆくシリーズをスタートさせたいと考えています。

私の好きな

まちなかスポット

湖東焼窯跡

陶芸家 中川 一志郎

彦根の町で幕末に、湖東焼という焼き物が焼かれていた事をご存知の方はどれくらいおられるのだろう。

佐和山山ろく、現近江鉄道を米原に向かうとすぐに、佐和山トンネルに入る。そのトンネルの入り口左側に、当時の窯跡がある。平成2年に、滋賀県の史跡に指定され、石碑も立てられた。どのような焼き物が焼かれていたのだろうか。幾度となく足を運んで陶片を探してみたが、日用雑器のような陶片ばかりで、名品の面影は残っていない。しかし、窯跡らしき積み重ねられた煉瓦を見ると、当時の窯の大きさがうかがえる。歴史の事実と照らし合わせて史跡を訪ねてみると、そこは夢街道。彦根の藩窯として栄えた窯であったことから、万延の桜田門の事変後は徐々に衰退していった。

作家の幸田真音（こうだ・まいん）さんが書かれた「藍色のベンチャー」という湖東焼を題材にした小説がある。それは、焼き物に取り付かれたひとりの商人・絹屋半兵衛と妻・留津の物語である。この小説を読んで、是非自分の目で確かめたい衝動にかられ、全国から遠路遥々、彦根を訪れる人が増えた。

試行錯誤を繰り返し、目指す名品を探求し続けた商人の夢。窯後を訪れるたびに、当時の名工達が働いている姿を思い浮かべる場所である。



金襴手菊蝶図煎茶碗（中川一志郎作）

船町に現存する絹屋↓

湖東焼窯跡の道標・古沢町→



特集 世界遺産登録をめざして 武家の古都・鎌倉の取り組みに学ぶ

彦根景観フォーラムでは、平成17年2月19日(土)、彦根市本町二丁目の宗安寺で、彦根景観シンポジウム「世界遺産登録に向けた鎌倉の活動に学ぶ」を開催、約100名のかたにご参加いただきました。鎌倉市役所世界遺産登録推進担当の玉林 美男さん、御堂島 正さん、「鎌倉の世界遺産登録をめざす市民の会」の内海 恒雄さんに、鎌倉の取り組みをうかがいました。

平成20年登録をめざし、準備が進む鎌倉

「彦根城」と「鎌倉の寺院・神社」は、平成四年に日本政府がユネスコに提出した世界遺産登録暫定リストに掲載されましたが、推薦に到っていません。



鎌倉市では、平成8年度に世界遺産登録を市の総合計画に位置づ

け、翌年度から切通しや大仏殿などの遺産の学術調査や発掘を開始しました。また、平成13年度に「鎌倉市歴史遺産検討委員会」を設け、同時に「世界遺産登録推進担当」課を設置、平成16年5月に鎌倉の世界遺産登録に向けたコンセプトを、「武家の古都・鎌倉」と公表しました。

今後3年間で、国の史跡の追加指定と史跡の保存管理計画の策定、登録対象遺産の決定、また遺産の価値や環境を保護するためのバッファゾーンの確保に取り組み、平成19年度に推薦書原案を国に提出、20年度にはユネスコ推薦の予定です。神奈川県も職員2名を市に派遣し、県内各地で世界遺産登録に向けた展示会や講演会を開催されています。

市民による「世界遺産を生かしたまちづくり」

「鎌倉歴史保存会」などの市民団体は、世界遺産登録を、鎌倉らしいまちづくりを進める機会ととらえ、さまざまな分野の専門家のネットワークを構築するとともに、世界遺産登録を小中学校の総合学習の題材に取り上げたり、史跡を目に見える形で市民に公開するなどの活動を行っています。また、市民シンポジウムの開催、中学生による史跡の草刈り、清掃活動である「緑のボランティア」の実施のほか、市民団体が集まって「世界遺産をめざす市民の会」を発足させ、行政と



連携して活動しています。

彦根の城下町遺産をどう守り、活用するか

第2部では、参加者によるワークショップを行いました。町家や足軽屋敷など彦根の世界遺産登録の拠り所となる貴重な遺産が次々と失われているなか、市民参加で情報を集め、まちづくりに生かすにはどうすればいいか、グループで話し合いました。



その結果、なによりも彦根市民が地元の歴史の豊かさを知らないの、誰もが参加できるワーク

ショップを重ね、その中で、ワークショップによる発表地域の建物や風景を住民自身がデジカメやITを使って集め、専門家と話す機会を作っていく、などの提案がなされました。また、街歩きルートを作り、市民ガイドが案内する、町家の魅力を生かした店づくりやコミュニティ利用を提案する、町家のリフォームのモデルを示すなどのアイデアも出されました。

彦根が大好き！ ぜび市民の手で

シンポジウムに先立って、中心部寺院の拝観ツアーを行いました。禅様、和様が融合した建築や装飾が残されており、講師の内海さんも、「すばらしい」を連発されていました。

じつは、内海さんは、「彦根が大好きで、何度も彦根に来ている」そうです。「近世の城下町をこれだけ残している所は彦根しかない。ぜびこの素晴らしい彦根を市民の手で守り、よりよくしていきましょう。」と熱っぽく語られたのが印象的でした。(堀部栄次)

【一口メモ】 我国では、現在12件が世界遺産に登録されています。一つの国からは同じ種類のを重複して登録しないことになっているため、彦根城は1993年に登録された姫路城と類似しており、お城単独での登録は困難といわれています。

しかし、お城とともに、藩主、重臣から足軽までの武家屋敷や藩校、寺院、町人屋敷、堀や水路、脇街道、宿場町など城下町を構成する要素がほとんど残っている地域は他になく、日本の近世城郭都市の完成形としての価値は極めて高いと考えられます。